

虹

たっぷりと眠つてゐるつもりだった。それなのに、八時五分には自然に眼が醒めてしまった。いつもより五分遅いだけだ。習慣が身についている。そう思つただけで、自分がとても窮屈な、融通の利かない青年のような気がして、たまらなくなつた。せっかくの火曜日ではないか。あくせくと一日をはじめなくともいい日なのだ。蒲団の中でもぐもぐとそんなことを考へると、なおさら腹だたしいような気持になつてしまつた。

家中の中は静まりかえつてゐる。耳を澄したが何の物音もしない。きっと母は夜明けとともに起きて、わずかばかり残つた畠の草取りにでも出かけたに違ひない。父がああなつてから、母は畠仕事に精を出しはじめた。まるで、むきになつたみたいにだ。

母も父同様、変つたのだ。村の人間にあの人のことでの弱味を見せたくはないんだよ、と常々口にする。それに父への悪口と愚痴だ。好奇心と薄気味悪いものでも見るような村人の視線を前にして、先手を打つて父をあしざ

まにいるのは、母がここで生きて行くためにはどうしても必要なことなのだろう。それにここで死ぬためにもだ。村人とは上手につきあわなければならぬ。愚痴のほうは、おもに僕に向けられた。どうしてあたしらはこんな肩身の狭い思いをしなくちやいけないのかねえ、とか、あの人の身体の中にはキツネでも棲みついてしまつたにちがいないんだ、とか散々こぼす。

——この先もあんな調子だつたら、どうしたらいもんかね、あんたの結婚のことだつてあるし、何かいい考えはないかい。

時々、父のことでそう僕にたずねる。

——ほうつておけばいいだろ。何か他人におかしなことをするわけでもないんだし、それにもう家を出て九ヶ月にもなるんだ。

素氣ない返辞に、母は溜息をつく。愚痴を聞いたり、喋つたりする年齢では、僕はなかつた。母とて、相談や悩みをうちあけているわけではないのだ。そんなことは

承知しているつもりだ。できることなら、父をどこか遠くの、村から離れた病院にでも閉じこめておきたいだけだ。それ以上僕がとりあわすにいると、あんたはどうしてそんな薄情な息子なんだろうね、としきりに嘆く。薄情？なるほど母のいうとおりかもしれない。しかし、僕にもいいぶんはある。たとえ母のいうのが当っているとしても、僕は父の悪口をこれっぽっちだって口にしたことはない。今後もそのつもりだ。

さつさと起きてパジャマを脱いだ。ゴールデンウイークまで三週間たらずだ。四畳半の僕の部屋には、あと四ヶ月で二十五歳になる若者が持っているようなものは何もなかつた。CDプレーヤーもラジカセもビデオデッキもだ。あるものといったら数冊の怪奇小説と、この村から流れている川に住む野鳥や魚や昆虫、川そのものの写真集だけだ。

この村では車を除けば、それ以外のものは持つていても必要がなかつた。なにしろ、レンタルビデオ店もコンビニエンスストアも、ここからいくつもトンネルを抜け、川沿いに車を走らせ、五十分もかけた所にある人口二万八千ばかりの小さな町に行かなければ一軒もないのだ。四月だというのに肌寒い。身震いが起きた。窓をあければ、百五十台はつめこめる無料駐車場と、街の人間が

湖と呼んでいる貯水池とダムの堤防が視界に入るだろう。それに、朝の山の冷気が皮膚をこわばらせ、水のかすかな匂いが漂つてくるにちがいない。村の四月は、百九十九ヶ日以上下つた下流にある一千万人以上の人間が住む大きな都会の春とはわけがちがう。

とにかく、と僕はジーンズに足を通して、気持にはずみをつけるために思つた。とにかく、今日はカビ臭い郷土資料館の受け付けに一日坐つていて肌に持つ。数年前、村役場をやめた六十二歳の館長と世間話をすることもない。あそこに一日坐つていたら、まるで僕の皮膚まで眼に見えないカビが生えてしまう気がする。ウェスト・ポイントのジーンズは洗いたてで肌に持つ。ファスナーをしめ、トレーナーをはおる。

川や野鳥や魚の写真集は、館長が貸してくれたものだ。きみは私の後継者なのだから、と彼は勝手に決めていた。

——ダムや貯水池の歴史や、川の生きものについて、よく知つておかなければいかんよ。

その一冊がひらきっぱなしになつていて。黒のハイヒールと半袖のブラウス、白い帽子に、スカートをたくしあげて両足を剥きだしにした若い女が河原を歩いている姿が映つている。柔らかな夕暮れ近い夏の光でグラウ

スは透け、ブライダルをしていない乳房がぼんやりとまるみをおびていた。写真の下には夏の河原は都会の香りに満ちている、と書いてあつた。

ゴールデンウイークになつたら、こんなふうに美しい水や川を求めて、都会の人間が車やバイクやバスで、この村にもわんさとやつてくるだろう。貯水池を眺め、ダムを見おろし、一軒だけある村営の土産物屋に立ち寄り、ついで郷土資料館にやつてくる。貯水池に沈んだ民家の模型やバネルや、九月の祭りに使う御こしを眺める。

屈んで写真集を閉じた。それから蒲団をたたんで、押

し入れにしまつた。ゴールデンウイークや夏や紅葉の季節。そうなのだ。確かに都会の香りで満ちるだろう。駐車場は満車になり、民宿も有料のマス釣り場も稼ぎ時になる。僕はといえば、一日、埃っぽい資料館のカウンターに坐り、大人二百円、子供百円の入館料を受け取る。

かわりに見学のしおりを渡す。あとはやることがない。

実際、そうだった。思わず苦笑がこみあげる。ここにいるかぎり、まるで僕の青春は、ダムの底に沈んだ村のようなのだ。そんなふうに自分の年齢を考えることに、どうして耐えることができるだろう。村が都会の香りに満ちる前にどうしてもここを出て行く。仕事はどうにかなるだろう。もう、父のことも母のことも考えたくはない

い。資料館の後継者になることを想像するよりも、居間へ行つた。卓袱台に父へ届ける弁当と朝食が用意してあつた。火曜日、父の弁当は僕が届ける役目だ。食器の上には布巾がかぶせてある。どうせ、母がせつせと摘んできた山菜料理と塩づけした川魚と、さめたみそ汁だ。

煙草を吸い、窓を開けた。斜面の中腹にある家からは、青黒く水をたたえた貯水池と、がらんとした駐車場が一望のものに見渡せた。元々、僕の古い家もあの水の底に沈んでいるのだそうだ。

空は曇つていた。ひと雨来そうだ。貯水池の水量は六月の梅雨時に比べれば、そう多くはない。水面にコガモが何十羽と群れている。それに何羽かのユリカモめだ。汚染された下流から逃がれてきた奴だろう。

貯水池のふちに、ダムに通じるコンクリートの道が見える。人は誰もいない。ダムの堤防の所で下をのぞけば、水門からしぶきをあげて流れ落ちる水が見えるはずだ。それが渓流になり、キャンプ場になり、写真集に映つていた剥き出しの足の女が散歩していた河原になる。その先、川がどうなつていてるのか、知らない。

空腹の朝の煙草はうまかつた。窓の敷居でもみ潰し、外へ捨てた。まだ僕は一日をどうやってはじめていいの

か、目的を見失っている男のよう、人っこひとりないな

い貯水池を眺めていた。駐車場の外れに、小さな東屋と

バスの停留所が見えた。停留所の向かいは村営の土産物屋で、まだシャツターガ降りている。車は五台、とまっているきりだ。一台は僕のポンコツの赤のスバルだ。三

台はダムの職員が見回りに使うジープやトラックで、残

りの一台は、潤一のシルバー・ブルーのシルビアだつた。

他のスポーツカー・タイプに比べたら、ごく安いほうか

もしれないが、それでも中古で百四十万はくだらないだ

ろう。十日ほど前、都会に住んでいた潤一は、ふらりと

村に戻った。それ以来、車はあそこに置きっぱなしだ。

まるで暴走族の忘れ物みたいだつた。そう考えるとおか

しかつた。

あいつが村を出て行つて何年だろう。六、七年。高校を卒業してじきだつたから、それぐらいだ。十日たつても、帰る様子もない。あいつがこの村に住みつくとは考えにくかつた。何があつたところであいつの勝手だ。顔を洗おう。僕の勤める資料館は、土産物屋の陰で見えない。窓を離れ、サンダルをつっかけて、狭い、じめじめした土間に降りたつ。蛇口をひねつて、てのひらで水をすくい、顔を洗つた。洗いながら休日なのに、何もすることのない自分にあらためて氣づいた。酸欠の魚のよう

に息が詰まりそうだ。正午になつたら、車で遠出しよう。いい思いつきだ。そうきめた。

車をとばして、とりあえず電車の駅まで行く。都会からの電車はそこが終点だ。ダムや貯水池が見たければ、その駅発のバスで来るしかない。あとは車だ。駆をすぎたら、僕は線路と渓谷に挟まれた道をどんどん下る。レンタルビデオ店やコンビニエンスストアのある小さな町も素通りだ。さらには何十キロか下り、人口十五万の街へ行く。とりあえず、今日はそこにしよう。水はつめたい。むきになつて顔を洗い、やみくもに考える。その小都市には映画館が二軒ある。暗がりに坐つてスクリーンを見る。できれば不動産屋もあたつてみようか。いや、僕が望んでいる街はもつと下流の大都会だ。

タオルで顔をふき、居間に戻る。卓袱台の前に坐つて布巾をとる。やはり山菜と川魚だ。父の弁当を見る。なんだかんだいつても、父を飢えさせるわけには行かないのだ。自炊用の食料は月一度、まとめて運ぶ。火曜日には弁当を持つて行く。父の様子を確かめる目的もある。朝からぐだぐだ考えていたら、僕も父のように、頭の中に他の誰かが棲みついてしまつても不思議はない。何かをすることがだ。人混みの中にいることだ。手早く、僕は朝食をすませた。

父に届ける弁当を持つて家を出た時、斜面の上から、朝一番のバスが停留所にとまるのが見えた。客は女ひとりだ。土産物屋の従業員なら次のバスだつた。遠くから眺めただけでも、街の女だとすぐにわかる。草色のワンピース姿で、ひどく軽装だ。街の人間だとしてもあんな恰好で、のこのこと朝一番のバスでやつてくる人間は珍しい。

駐車場に降りるわるい斜面を歩きながら僕は、停留所に降りたつた女が、運転手とひとと会話を交している姿を眼にとめた。本当にこんなに朝っぱらから物好きだ。女は運転手との話をやめ、周囲を見回している。行くべき場所などない。せいぜい、貯水池を眺めるぐらいだ。そうでなければ東屋でも休むかだ。

家を出た時には、貯水池にコガモやユリカモメが水面に浮いているのが見えたが、下るにつれ、コンクリートの堤防にそれらはかくされてしまつた。舗装された道路を渡り、駐車場に入った。

不意に父のことが頭に浮かんだ。一週間、どうしていろいろ。父が九ヶ月前から自分で勝手に住みはじめた廃屋まで、車で七、八分ほどだ。この村を見捨てて行く者が多くなり、父のような男が住める家がふえたのは、幸

運というべきかもしれない。すくなくとも行き場はあるのだ。バスでひと停留所向こうにある村役場では、ぽつぽつと増え続ける廃屋を、都会の人間むけに五千円か一萬そそこの家賃で貸していた。しかしそんな家賃でも、腰を落ち着けて住みたがる者は滅多にはいない。住んでも、半年と持たずに都会に帰つてしまつ。あたりまえの話だ。昔から住み続けた者でさえ、一家をあげて見切りをつけたのだ。父はそんな廃屋を、わずか三千円で借りて、母と息子の元から去つた。

駐車場は広々として、路面はひえていた。水気を含んでいるように思える。ワーカーブーツの底が湿つた音をたてる気がした。たぶん夜明けにでも、霧がたちこめたのだろう。真つすぐ自分の車に向かつた。さつきの女が、停留所の所でこつちを見た。若い女だ。二十五かそこらだろう。バスの運転手は折返しの時間を待つあいだ、くつろいで帽子を脱ぎ、ハンドルに両肘をのせてぼんやりと貯水池を眺めている。女がこつちへ歩いてきた。気づかないふりをして、僕は自分の車まで行つた。ドアをあけ、父に届ける弁当を助手席に置いた。女はためらわずに車までやつて來た。まだ僕は彼女に気づかないふりをして運転席に乗り込んだ。シートベルトをしめた。彼女は一度、車の正面に立ち、ゆっくり運転席のほうに回つ

て來た。ついで、閉めた窓硝子をノックする。僕は窓をあけ、かがんだ彼女の顔を見つめた。彼女もぐつと僕を覗きこんだ。幾らかやつれたような顔だちで、けれど輪郭のやさしい眼をしていた。

彼女はゆつたりと微笑を浮かべた。先にこつちから口をひらいた。

「どうかしましたか」

「ねえ、あなたはこここの村に住んでいらっしやるの」

なれなれしくはないが、物おじしない声だった。僕は頷いてみせた。そして斜面に建っている家を指さし、そこにね、と答えた。ここから見ると、家は見すぼらしく、くすんで見えた。彼女がちょっと振り返って斜面を見上げ、すぐ視線を戻す。

「いい場所に住んでいらっしやるのね」

何と答えるべきか。ふと、例の写真集にあつた足を剥きだして河原を歩いている女を思いだした。それに、両

親が有料のマス釣り場を経営している、二歳齢下の利恵

のことも。利恵とは月に二、三度、渓谷を下つた河原で抱擁しあう。けれども、この女が発散する眼つきやかす

れたような声の調子は、利恵とは比べようもなかつた。

「お聞きしたいことがあるの」

わかることだつたら何でも答えますよ、と僕は物わか

りのいい青年のような口振りでいった。

「ほら、あそこにとまつてある車があるでしょ」

十台分ほど間のある場所にとめてある潤一のシルビア

を顎で示した。

「暴走族の忘れものか。目ざわりな車だな」

ほんの冗談を僕は口にした。でも、と彼女がいつた。

「ポルシェなんかより、ましでしょ」

「まつたくだ」

話のわかる女だ、と思った。確かにあれがポルシェだつたら、たまつたものではない。

「でも、あれがどうかしましたか」

「あなた、あの車の持ち主を知つてらっしやるわよね。どこへ行けばその人と会えるかしら」

思わず僕は彼女の輪郭のはつきりした眼を覗き込んだ。彼女のほうでも、まばたきもせず、僕の内側を見るような眼つきをした。

「さあ」

僕は一瞬ためらい、それを悟られまいとして慎重な声になるよう努めていた。この女がよりによつて、朝一番のバスでわざわざここへやつて来た目的が部分的に理解できた。すると用心深い気持が働いてしまつた。女が眼を鋭くさせて僕を見、ついで、ゆつたりと口元をほこ

ろぼせた。

「かくそつとしないでね。ナンバーでわかっているの。あなたはここに住んでいるんだし、潤一のことは知つて

いるはずよ。わたしは彼に会いに来たの」

声も物腰も落ち着き払つていたし、断固としていた。

「潤一とはどんな……」

「女友達つてところかしら。ううん、違うわね。実は一

緒に暮していたの」

あいつは何かまずいことでもしてかして、村へ戻つたのだろうか。いや、考えすぎに違ひない。派手な痴話喧嘩か、その種のことだろう。とんでもないことをしてかせるような男ではなかつた。のこのこ村へ戻るのからしてそうだつた。あいつは都会でどんな生活をしていたんだろう。いずれにしても、僕があれこれ想像すべき問題でもない。それでも潤一に先に知らせたほうがいいのではないか、と一瞬、思った。

「あなた、何か心配しているの。迷惑はかけないわよ」「迷惑だなんて」

「それじゃ、この村では若い人でも余所者を毛嫌いするのかしら」

僕は答えたが、そんな気持が自然に自分の中にも流れ

ているのかもしれない気がした。

「いいわ。でも、気が変つたら教えてもらえるかしら。今日は、一日ここにいるつもりよ」

用事があるんです、まず父に弁当を届けて、と僕はいかけた。いいわけにすぎない。彼女に必要なのはそんなものではない。わかりきつたことだ。

彼女が車から離れた。僕はエンジンをかけた。アクセルを踏み、正面を見つめて発車させた。道に出、右折する時、バックミラーに背筋を伸ばした彼女が映つた。潤一もなかなかやるじやないか。女が追いかけてくるなんて、たいした色男だ。街でのあいつの生活。まさか住み場がなくなつて、上流にまで移つて来たあのユリカモメでもあるまい。スピードをあげる。考えが変つた。父の所へ行く前に、やはり潤一に会つておこう。そうしよう。さして、時間もかかるないだろう。

潤一の家へ行くと、玄関先の庭で彼の母親が洗濯物を干していた。僕が車から降りたつのを見るなり、あら、まあ、とうちとけた声を出した。ひさしぶりだつた。おはようございます、といつてから潤一のことをきいた。おばさんは洗濯物を干すのをやめ、エプロンで手を拭きながら、せつかく来てもらつたのに、あの子、いないの

よ、と答えた。潤一の父は長年、村役場に勤めている。

もう出勤した時間だ。庭は広い。花が植えられ、手入れも行き届いている。車の三台は置けるだろう。シルビアを駐車場に放りっぱなしにせずにこの庭に置いてもいいのに、と考えながら、あいつ、と僕はひとりごとのよう

にいった。

「どこへ行っているのかな。ひさしぶりに顔が見たいと思つたのに」

「それがねえ、毎日、朝から夕方まで、ほうけたようにマス釣り場に行っているのよ。何を考えているもんだ

か」

「いい若い者が、恥ずかしいたらありやしないわね、とそしてつけ加えた。

「どこの釣り場ですか」

「ほら、利恵さんとのこ」

「マスなんか、この辺の川で釣つたほうがずっとおもしろいのに」

おばさんが頷く。実際、利恵の家が経営するマス釣り場は、釣りもしたことのない街の人々がやつて来て、一日愉しむ場所だ。うちのお父さんもあの子とはろくに口も利かないようになってしまつて、とおばさんは笑いながらこぼした。珍しいことだつた。さつきの女のことは

耳には入れられない。そう思うと、それ以上、何を話していいか、言葉がどこにもない気持になつた。ぎくしゃくしてしまいそうだつた。その時、おばさんが、思いだしたように、父のことをたずねてきた。

「この頃、お父さんはどんな調子？」

「同情でも、詮索でもない口振りだつた。

「身体のほうは元気なようですね」

僕はいい、これから弁当を届けるところなのだ、と続

けた。

「あんたのお母さんも大変だわよね」

ええ、まあ、と僕は曖昧に答へ、父がおかしなことを口走るようになつた時のことを見いだしてしまつた。村の誰かが水やお茶の中に、身体の関節や頭を痛くさせる薬をこっそり入れているとか、夜中に誰かが忍び込んで雨戸の隙間から排気ガスを流しこんでいる、などといいはじめた頃のことだ。そんなものはただの筋肉痛とか頭痛だし、気のせいだよ、と僕も母も最初は一笑に付したものだ。ところが父はどんどん真剣になつて、そんな仕業をしている人間を俺はつきとめてやる、といいはじめた。俺んとこの集落が湖に沈んでダムになる時、一番反対したのは家の爺さまだ、それを根に持つている連中があやしい、などといった。根も葉もないことだ。家が貯

水池の底に沈んだのは、父が産まれたか産まれない頃のことだ。そのうち父はお茶でさえ、滅多に口にしなくなつたし、深夜、雨戸に向かつて怒鳴つたりするようになつた。

なる始末だつた。すでに、働き者の無口で祭り好きの父ではなかつた。父はどんどん僕らから遠ざかるばかりだつた。一度だけ、資料館の裏手にある駐在にかけこんだこともある。顔見知りのおだやかな初老の警官がこつそり訪ねて来て、母に、村の誰かがひどい仕打ちをするとあんたの旦那さんがいつて来ただが、と教えてくれた。母はおろおろした。そんなことを訴えられても、わたしにやあ、どうすることもできんからね、どうだろう、

一度、街の病院でみてもらつたほうがいいんじゃないかなあ、と警官は茶飲み話でもするようになつた。母は置きに額をこすりつけるようにしてあやまつた。身体がこきこきに震えていたのを覚えている。なあにわしはこれが仕事だから、ほら、何でもない、立派な肩書きを持つている街の人だつて、わざわざダムに飛び込み自殺したりするからねえ、わからんもんだよ、人間なんて、と警官は母を慰めた。それから母と並んで坐つていた僕の肩を叩き、なんでもないよ、父さんはちつとばかり、疲れただよ、休めばすぐに元に戻るから、といつて出て行つた。

「本当にねえ、あんたのお母さんも……」

潤一の母がつぶやいた。でもねえ、とそれから満面に笑みを作つた。

「あんたみたいな息子がいるもん、お母さんも安心していられるわね」

まだ何かいいたそうだつた。潤一のことに結びつけられそうな予感がした。僕はおばさんがそれ以上喋る前に、

利恵のマス釣り場に行つてみますよ、といった。もつと何か必要な気がしたので、あいつとは子供の時からずっと仲が良かった、高校の時なんか、バスと電車で二時間もかけて一緒に通つたものです、といつてみた。そうだつたわね、ふたりともやんちや坊主で、と潤一の母親

はいった。

「おじさんによろしくいって下さい」

「あんたは優しい、いい青年になつたね」

内心、僕はどぎました。ゴールデンウイークの前に、父も母も資料館も村もかえりみずに都会へ出て行こうと、固く誓つてゐるのだ。優しい、いい青年。他人の眼からちょっとともそう見えることが耐えがたい。

「とにかく潤一に会つて来ます」

早々と僕は立ち去ることにした。潤一の母は広々とした庭に洗濯物を干しはじめた。背中を向け車に歩いた。

何故あいつは車を家に置かないのか、貯水池の駐車場まで歩いたら、たっぷり十分はかかるのに、とふたび思つた。しかし、おばさんに直接たずねていいことではなさそうだった。おじさんと潤一もしつくりいつてない口振りだったのを思いだす。車に乗つた。ドアを閉めた。いい青年、という言葉を振り払おうとした。潤一がそれを聞いたら皮肉をこめて笑うかもしれない。潤一は僕がこの村を出て行きたがつていることをちゃんと知つてゐる。あいつが村に戻つた時、その足で資料館をたずねて來た。元気そうだな、といつたあとで、おまえ、だんだん資料館にふさわしい顔つきになつて來たぞ、といつた。冗談じゃない、ゴールデンウイークの前には他

の場所で暮してゐるよ、と僕は事務所にいる館長に聞こえないように低い声をだした。好きにするさ、とあいつはいった。あの時、車を見せてもらつた。いい車だ、高かつたろう、と僕はシルビアを一周して話した。中古さ、どうつてことはないよ、今時、中古車セントラルに行つたら外車だつて掘り出しものはごろごろしてゐぞ、とあいつは答えた。

車を道に出した。貯水池で会つた女の顔がちらついた。

潤一の母と僕の母の顔もだ。腕時計を見る。まだ九時四十分だ。ここでは時間の流れがとても遅く感じられる。人々はゆつくりと齢をとる。けれど僕は真っぴらだ。

りだ。村のどこにでもある見慣れた風景が車の外を流れ行く。時々、場違いのようく清涼飲料水の自動販売機が埃を被つて突つたつてゐる。

母は烟でそろそろ一服休みでもしてゐる頃かもしけない。父のことで母が気をもむひとつの理由には、利恵のことが含まれてゐる。おまえの結婚にだつてさしさわりがあつたら困るじやないか、と母が口にする時は、利恵のことが頭にあつてのことだ。母の願いは、息子が利恵と結婚し、平凡な家庭を築き、孫の顔を見ることだ。そう思うと、胸がわずかに軋んで疼く。しかし、それもわずかだ。すぐ忘れた。狭い道の両脇は、四月の草が生い茂り、うつとうしいほどだつた。窓から入り込んで來る風が皮膚をなぶつた。ハンドルを操作しながら、僕は口笛を吹いた。潤一に会い、利恵と言葉少なに話し、父の所へ立ち寄り、そのあと人口十五万人の小都市まで行く。自由な一日なのだ。それを思ひだした。

うねつた道を登りきった所が利恵の家のマス釣り場だつた。街から來た客は誰もいない。古い木造の建物の左脇に、釣り場になつてゐる溪流が見えた。砂利を敷きつめた駐車場に車を入れた。そこからフェンスになつて、釣り場に入れば片側をすつと覆つてゐるはずだ。

駐車場の片隅に自転車が一台置いてあつた。潤一のだと直感した。せつかくの車を使わないなんて、本当に何を考えているのだろう。だが、利恵のマス釣り場にあんなスポーツカーが一台ぽつんとあつたら、それも何だかお笑いだ。あいつにあつたら、車のことや女のことや、毎日あり余る時間を持て余しすぎて、何ひとつやるべきことのない男のようマス釣りで暇潰しをしていることを、軽い気持でひやかしてやろう。

ワーネブーツで砂利を踏み、薄暗い建物に入つた。生臭い魚の匂いが、黒光りしてゐる柱や壁にこびりついてゐるようだつた。中央にある広い木製のテーブルの前の椅子に坐つた利恵が真つ先に眼に入つた。おかっぱのようく飾り気のないヘアスタイルで、うつむいて熱心に雑誌を読みふけつてゐる。入口に突つ立つて僕は、こぶしで壁をとんとん叩いた。利恵が顔をあげた。化粧もしてない顔で僕を見、まぶしそうに笑つた。僕の一番好きな表情だ。やあ、と僕は片手をあげた。

「そつか、今日は火曜日なんだ」

利恵が雑誌を閉じ、椅子から立ちあがつた。机に雑誌を置く。美容の専門誌だ。そこは暗く広かつた。外のガランとした景色が、あけた戸の向こうに見え、釣り場の浅い水の流れが利恵の背後にあつた。日曜日やゴールデ

ンウイークには、都会から来た人々で一杯になり、彼らの釣ったジマスの腹をさいたり、塙をなすりつけたりする場所だった。包丁を手際よく使つて、それらの仕事をできぱきとこなしている利恵を、これまで何度も何度か見たことがある。

「まさか、釣りに来たなんていわないわよね」

「利恵に会いに来たんだ」

「本当？」うれしいな」

利恵は陽気で屈託もない声をだした。彼女といふと、いつも感じること、自分がまるで陽光の内にいるという感じが甦つて来た。冗談、うまいんだから、だまされないわよ、と利恵は弾んだ声でいながら、五日前の夕暮れ、渓谷を降りた河原で抱擁しあつた時のなごりのような熱っぽい眼をした。すると僕は潤一のことなどどうでもよく、彼女と話をしたくて来たのだ。彼女に伝えておくべき言葉があるのだ、という気持になつた。

「でも、たまにはここで釣るのもいいかもな」

「毎日だって構わないんじやない」

「潤一みたいにか」

利恵が、あら、よく知つてゐるじやない、という顔をした。

「あいつ、毎日、ここに来るんだって」

「潤一みたいにか」

利恵が、あら、よく知つてゐるじやない、という顔をした。

自動販売機にコインを入れ、冷たい缶コーヒーを買ひながら、さり気なくきいた。

「うん、毎日、自転車でね。あたしに気があるみたい」

「バカ」

コーヒーを飲んだ。よくひえていて、ひと口飲むと、咽がひどく渴いているのがわかる。

「そんなんじやないわよ。父さんがそう話すだけ。いいか、気をつけろ、都會からあんなチャラチャラした車で戻つて来てブラブラしている若い者は信用しちゃあなんねえぞつて」

利恵が親父さんの声や口調を真似たので、僕は声をあげて笑つた。今日はじめて心から笑つた。そしてたぶん、それが村を代表する潤一への評価なのだ、と考えた。

「親父さんは」

「養殖の堀よ」

飲み終えたコーヒーの缶をくずかごに捨てた。

「潤一に会つて行こうかな」

「そんないい方を僕はした。

「いいんじやない。ふたりで、アウトドア・ライフなんて」

「釣りもやるよね」

「わかつたよ」

「釣りもやるよね」

「明日は？」

「考えておくよ」

「ずるいんだから」

「知らなかつたのか」

僕はとぼけて、潤一の顔でも見てくるかな、と釣り場へ向かつた。石の階段を十五歩ほど降りるとすぐに浅い渓流になつてゐる。水の流れる音は柔らかく、釣り人は姿も見えない。渓流のもつと下流にいるのだろう。利恵との結婚。母はそれを強く望んでゐる。なるほど僕にもそういうことがあつていい齡だ。しかし利恵の両親が僕の父をどう考へてゐるかはわからぬ。村の多くの人間がそうなように、まるでおかしな氣味の悪い生きもので見つめるように、利恵の両親も思つてゐるかもしれない。そうであつても不思議はない。どうして父は自分の家の水に村の誰かが毒物を入れてゐるなどといつた、馬鹿氣の考へにとりつかれてしまつたのだろう。渓流沿いに沢を下り、しかし、父のことを持ちだすのは僕の逃げ口上にすぎない、なんて奴だ、と自分を強く感じた。利恵は僕を、するいんだから、といった。あれはただの軽口だが、そうとばかりもいえまい。ゴールデンウイークの前に村を捨てることを、まっさきに利恵に告げるべき

ではないか。僕には打算だけしかないとでもいうのか。潤一に、例の朝一番のバスで訪ねてきた女の話をしたら、帰りにはつくりと利恵にそれをいおう。

人のいない釣り場は奇妙だった。しんと静まり返り、バーベキューの煙も、子供のはしゃぎ声もない。反対側は沢に沿ってフェンスがなだらかに続き、自然の渓流を利用した釣り場にはマスが身をひるがえす姿も見えない。きっと利恵の親父さんは養殖の堀からマスを放流していないに違いない。突き出た岩場があり、そこを曲がった時、六十メートルほど先で潤一が水面を見つめて糸をたれている姿が見えた。おおい、と僕は叫び、急ぎ足で近づいた。隣りに立った時、潤一が僕をちらりと見、すぐ釣り糸に視線を戻した。よく、ここにいるとわかつたな、といった。おばさんにきいたんだ、と答えると、そうか、と頷いた。僕も竿を脇に挟み、すぐエサをつけながら、釣れたか、ときいた。

「まるつきりだ。ここマスは頭がいいよ」「毎日、来ているんだって」「ああ」

「なんだか引退した老人みたいじゃないか」軽口のつもりだったが、潤一はにこりともしなかった。そして、釣りに来たわけじゃないだろう、と僕にきいて

きた。まあ、と僕はつぶやき、糸を上流に投げこんで、浅い水の流れにまかせた。どうもこうもない。单刀直入でいい。

朝のバスで女が潤一を捜しに来たことを、僕は話した。「そうか。来たか」

さして驚くふうでもない口調だ。僕とて深くたちいる必要はこれっぽっちもない。用件だけ告げればそれでいいことだ。

「俺の家は教えたか」「いや、その前におまえの耳に入れたほうがいいと思ってね」

「友達思いだな」「そう思うか」

思いがけず語調が強くなってしまった。どちらともなく自然に口を噤んだ。潤一は釣り糸をあげ、新しいエサに取りかえた。もとより僕はこんな場所でマスを釣る気もなかつた。放流されるマスは空腹で、小学生にだつてたやすく釣れるのだ。だが、ふたたび糸をたれた潤一は僕よりも、もつとやる気がなさそうだつた。僕は竿を河原にあげ、ジーンズのポケットからわくわくの煙草を出して吸つた。潤一が竿を持ったまま、くれないか、といった。潤一の所へ行き、一本出して口にくわえさせた。

口を利くきつかけができたので、車をどうして家に置かないのか、と僕はきいた。

「親父が目ざわりだとさ」

納得したように二、三度頷いて僕は紙マッチで火をつけてさしだした。潤一は顔を近づけ、炎を通して僕の眼を上眼づかいに見た。そして、女は何かいつていたか、ときいた。

「今日一日、貯水池にいるそうだ」

「勝手にするがいいんだ」

潤一が炎から顔を離した。

「一緒に暮していたんだろ」

「そんなことも話したのか」

僕は石の上にしゃがんだ。馬鹿らしくて釣りなどできない。

「電機会社はやめてきたのか。あそこは大手だろ」

「会社には休暇届けを出している」

こんなに長い期間か、と思つた。

「帰るんだろ」

「そりやあ、いわれなくつたつて戻るさ。でもあの女とは暮せないんだ」

「話しぐらいしてやつたらどうだ。わざわざこんな山奥まで来たんだ」

潤一は口を噤んだ。ひと呼吸置いて喋つた。  
「三時まではマスを釣る」

「それから」

「貯水池に行く」

「そうか。何があつたのか知らないが、ダムに飛び込まれちゃ大変だ」

「そんな女かよ」

「じゃ、どんな女だつていうんだ」

「男は俺ばかりじやないつてことさ。彼女にとつては俺もそのうちのひとりにすぎないのさ」

それでも、一緒に暮していたんだろ、という言葉を僕はのみ込んだ。潤一の言葉だけを一方的に信じるわけにはいかない。すくなくとも駐車場で声をかけられた時は、そんな女には見えなかつた。潤一が話を変えた。

「なあ、利恵はいい娘になつたな。結婚するんだろ」

「まだ、そんなことはきめていないよ」

「本当におまえ、村を出て行くのか」

「ああ、そのつもりだよ」

「街に住んだつて、別にいいことなんか何もないぞ」

僕は潤一とは違う、といいたかった。心を病んだ父と、父に関する村人のひそひそ話に敏感な母。小石を拾い、渓流に放りなげた。

「これから何年も資料館に坐つていろというのかい」

そうして都会の人間を眺め、ゆつくりとゆつくりと齡をとる。

「それなら、利恵を連れていけばいいさ。おまえたちなら、どこへ行つてもうまくやれるよ」

「そんなことはわからないな」

利恵は潤一の釣り糸を眺めていった。まるで釣る気もない。ただの暇潰しだ。

「三時には貯水池に行くんだな、潤一」

「ああ、できたらそう伝えてくれないか」

「何で僕が……」

「さつきおまえがいつたろう。ダムに飛び込まれちゃ大変だ」

「僕は駄目だよ。親父の所へ行くんだ」

「そのついでいいんだがな」

「今、行つてやればいいじゃないか」

「マスが釣りたいんだ。そのために村に戻つたんだからな」

伝えるも、伝えない、とも僕はいわなかつた。こんな話をいつまでもしていても仕方がない。たかだか女とのもめごとぐらいで、と思つた。資料館とおさらばして

街へ出たら、僕はどんなことがあつても、二度と村へは

戻らないだろう。もう行く、と潤一に声をかけて立ちあがつた。ああ、と氣のない返辞が帰つて來た。じゃ、といつて離れた。振り返らなかつた。

建物に戻つた。利恵に竿とエサ箱を渡した。潤一のことはきかれなかつた。さして興味があるふうでもない。「なんだ。もうやめちやつたの」

「ここで釣つてもおもしろくないよ」

「いつてくれるわね。日曜日になつたら繁昌するのよ」

建物の奥の壁に竿を立てかけて利恵はいつた。あのな、利恵、と僕は彼女のほつそりとした背中に声をかけた。

「なあに」

「ゴールデンウイークの前に……」

「何かいい話」

「村を出ようかと思つてゐる」

背中を見せたまま利恵は竿を置く手をとめた。ゆつくり振り返つた。眼を見ひらいている。僕のいつた言葉の意味が、急にはのみ込めなかつたのかもしれない。

「いやだ、そんなの」

利恵が低いがはつきりとした声で叫んだ。

「きめたことなんだよ」

「あたしはどうなるの。いやだ」

僕は首を振つた。真底、人を納得させるだけの言葉を

僕は持つてゐるだろうか。

「あたしは？ 連れてつてくれるの」

「利恵は残れよ」

「あたし、いい奥さんになる自信あるよ。あんたが行くならついて行くから」

「親父さんやお袋さんが黙つていいだろ」

「あんたとあたしの問題じゃない。両親のことなら何とかするわよ」

「駄目だ。街で落ち着いたら連絡する。約束は守る」

「何の約束よ。勝手に約束だなんて、そんなもの作らないでよ」

利恵はじつと僕を見すえ、前歯で唇を噛んだ。

「とにかく、明日は会える？」

しっかりと僕は頷いた。建物の古い柱時計を見た。父の所へ行かなければならぬ。それから十五万人の小さな街にもだ。ずいぶんぐずぐずと時間を潰した。

「明日、ゆつくり話せる？」

「うん」

利恵が近づいて來た。黙つて、並んで外へ出、砂利の駐車場へ行つた。車に乗り込もうとすると、早口で利恵がいった。

「忘れないでよ。本当にあんたとならどこでだつてあた

父の住んでる廃屋まで行くあいだ、利恵のことが頭から離れなかつた。自分がわからなくなりそつた。

だらしがないぞ、と僕は道を見つめ、時々、ハンドルを

片手で叩いて声に出した。

父の家に行くためには、一度貯水池に戻り、ダムと反対方向の、山と貯水池のあいだの道路を走らねばならな